

初期クリスチャンは「家から家に」戸別伝道をしましたか

この一つ前のレポート「60 福音を宣べ伝える一どのように」という記事の中で、「福音を宣べ伝える」と訳されている「エウアングリゾー」は「福音を分かち合う」という風に訳されるべきだという根拠を示しました。

このレポートは、その続編という位置づけになりますが、その記事の中でも引用した、使徒5：42に注目してみたいと思います。

(使徒5:42)「そして彼らは毎日神殿で、また家から家へ（カト オイコン）とたゆみなく教え、キリスト、イエスについての良いたよりを宣明し（エウアングリゾー）続けた。」

これを行ったのは、当時の一般の不特定多数のクリスチャンではありません。

これは厳密に「使徒たち」だけの行動です。

この聖句のそれまでの時間的流れを5章の最初から追うと、シーンが明確に見えてきます。

先ず、その虚偽の行いから、それを糾弾するペテロの言葉を聞いただけで命を落とすことになったアナニヤのサツピラの一件後、ペテロを代表とした使徒たちは、その「手を通してその後も多くのしるしや異兆」を起こし、「エルサレム周辺の都市の大勢の人が、病気の人や汚れた霊に悩まされる者たちを連れて集まり、彼らはひとり残らず治され」ます。そのことによって使徒たちは拘留されますが、み使いが獄の錠を解き、「行って、神殿の中に立ち、この命について言われたすべてのことを民に語りつづけなさい」と指示します。

それで、夜明けになって神殿に入り、人々を教えていると、またもや捕らえられ、サンヘドリンに連行されます。大祭司から、咎められたとき、「ペテロとほかの使徒たちは、「わたしたちは、自分たちの支配者として人間より神に従わねばなりません。」と断言します。

それから、「使徒たちを呼び出してむち打ち、イエスの名によって語るのをやめるようにと命じてから、彼らを去らせた。」ことがあった翌日からの記録が、この「彼らは毎日神殿で、また家から家へ・・・」という5：42の記録です。

何と、壮絶なスペクタクルなシーンではありませんか。

マタイ28：19，20で与えられた使徒たちへの使命を、果たせるように尋常ではない聖霊が働いていました。

この聖句は、その後の、全てのクリスチャンが見倣うべき、あるいは、同じ務めがあることを示すために書かれた記述ではありません。全く次元の違う話です。

そして、さらに、新世界訳のこの聖句の訳し方の間違い（というより、恐らく意図的な誤導と思われる）を指摘しておかなければなりません。

次に挙げるのは、使徒5:42の「カト オイコン；家から家に」という部分についての、参照資料付きの脚注の引用です。

「字義，「家ごとに」。ギリ語，カト オイコン。ここで「カタ」は対格単数形を伴い，配分的な

意味で用いられている。R・C・H・レンスキは…使徒 5:42 に関して次の注解を加えている；「使徒たちは…『神殿で』公然と、そして言うまでもなく, κατ' οἴκων[カト オイコン]にも行なった。これは配分的な、『家から家へ』の意味であって、単に副詞的な、『家で』の意味ではない」。

この脚注の目的は、新世界訳が「ギ語：カト オイコン」を「家から家へ」と訳していることの根拠、もしくは言い分けですが、単に「家で」という意味ではない、と言う学者の言葉を引用し、その故に「家から家に」であると主張しているわけですが、では、そうなら、どうして素直に字義通りに「家ごとに」と訳さなかったのでしょうか。

[新世界訳 日本語版]のように基本的に英語に翻訳されたものをさらに日本語に訳しているもの（重訳と言います）ではなく、ギリシャ語原本からダイレクトに訳された著名な日本語版聖書の多くは、「カト オイコン」を「家々で」と訳しています。

(色々調べましたが、「カト オイコン」を「家から家に」と訳しているのは新世界訳だけのようです。)

[使徒 5:42] 他の翻訳

新改訳 そして、毎日、宮や家々で（カト オイコン）教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。

新共同訳 毎日、神殿の境内や家々で（カト オイコン）絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた。

塚本訳 そして毎日、宮や家々で（カト オイコン）教えること、すなわち救世主イエスの福音を伝えることを、やめなかった。

前田訳 そしていつの日も宮や家で（カト オイコン）教え、キリストであるイエスをのべ伝えることを止めなかった。

新世界訳はカトオイコンを「家から家で」と訳し、同じ表現を別の所では「家々で」と訳している例がありますので、関連したあと二つの聖句も紹介しておきましょう。

[使徒 2:46]

新世界訳 思いを一つにして日々絶えず神殿におり、また個人の家々（カト オイコン）で食事をし、

（脚注：「個人の家々で」。または、「家から家で」。ギ語，カト オイコン。）

新改訳 そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家で（カト オイコン）パンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、

新共同訳 そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに（カト オイコン）集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、

塚本訳 また毎日、心を一つにして（熱心に）宮に詣で、家々で（カト オイコン）（一緒に）パンを裂き、喜びと純な心とで食事をして、

前田訳 そして日ごと心をひとつにして欠かさず宮に行き、家々で（カト オイコン）パンを裂き、よろこびと真心とで食を共にし、

この聖句では [カト] は文頭と途中に二回出て来ます。「日（毎に）」「カト オイコン；家々で」まったく同一の「カト オイコン」が食事の時は家々で、伝道の時は「家から家」になります。

目的を果たした個人宅でした。それで、「カト オイコン」はそうした家々、で「各会衆毎に」もしくは「各群れ毎に」とほぼ同様の意味あい使われています。この点「塚本訳」はその辺を分かり易く表現しています。

それで、カト オイコンが使われているのはどれも個人の家を使用した会衆を指していることが分かりますが、特に使徒20：20はカトオイコンを「公」と対比して用いています。「公でも個人宅でも」というのは、つまり、パブリックとプライベートの対比で、この文の意図するところは、あらゆるケースを活用したということであり、宣べ伝える際の方法論を述べている分けではありません。

「ギリシャ語聖書中に「カト オイコン」が出て来るその他の場所全リスト

(コロサイ 4:15)「…ヌンファと彼女の家にある会衆にわたしのあいさつを…」(家にある)

(コリント第一 16:19)「…アクラとプリスカ、ならびに彼らの家にある会衆が…」(家にある)

(ローマ 16:5)「…彼らの家にある会衆にも[よろしく伝えてください…](家にある)

(フィレモン 2)「…あなたの家にある会衆へ」(家にある)

これから分かるように、全く同一の言葉を、教えた、宣べ伝えたという記述の時に限って「家から家」と訳していることが分かります。

余談ですが、同じギリシャ語の「カト」が使われている新世界訳の、別の聖句の訳し方も何か「ヘン?!」というのをご紹介しておきましょう

まずは「新共同訳」からの引用です。

「民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。」(マタイ 24:7)

これと新世界訳を比較してみてください。

…そこからここへと(カタ トポス(場所))食糧不足や地震がある…

「〇〇から〇〇へ」という文章は連続して繋がった部分と、それに対する方向を示す表現ですから、その後続く表現は「行く」とか「向かう」「移動する」という類のもので、「ある」という語はつながりません。「東京駅から大阪駅へ 地震がある」というのと同じ文章です。希に活断層に沿って一直線上に順番に地震が起きる事があるとしても、その場合「そこからここへと地震が[起きる]」という表現ならまだましですが、いずれにしても、適切さを欠いた訳と言えます。おそらく、こうした訳し方によって、読者に「連続的に頻繁に」生じるというイメージを植え付けることには成功していますが、「カト トポス」は字義的に「場所毎に」という意味であり、所々、方々という意味しか無く、「ひんぱん」というニュアンスはありません。

ギリシャ語 カタ を 何としても「〇〇から〇〇へ」と訳そうとするあまり、とうとう、日本語の文章まで壊れてしまっていることにも気付かないほど、「家から家」妄想が強い症状となっていることを物語っているのでしょう。